

# 聴覚障害の方の生活を聴く・知る

シリーズ「そーなんだ」①

「困った人が居たら思わず手を差し伸べる」がボランティアの一番源の気持ちとすれば、「する」「してもらつ」という依存の要素を含んだ関係ではなく、まったく対等の関係性を作り上げていくことがボランティア活動全体のキーではないでしょうか。

こうした永年の問題意識を、個々のボランティアさんの観察力・対応力・持続力などのアツプを目指し「ワンランクアップ講座」が平成28年12月、3回にわたり開催されました。1回目のレポートです。

はじめに聴覚障害のある方々のお話を伺いました。



宝塚ろうあ協会 加藤さん

ろう者の加藤さんは、話相手の口元、話しぶりを懸命に注視すると言われました。長期にわたる訓練から日々の生活ではほとんどのことを克服してきまし

たが、スーパーなどで、短い会話が実は大変だそうです。例えば量り売りのものを購入するとき、結局いくらになるかを知るのが大変で金額が分からず、他の方への迷惑も考え、結局千円札をだし、自分の財布には何時もたくさんのお金が詰まっていると、冗談めかしてお話されました。



宝塚中途難聴者の会 竹沢さん

二番目の講師は中途難聴者の竹沢さんです。

全く健全だった聴覚が人生の途中、急に難聴になるといふ体験は実に大変な出来事です。竹沢さんの周りにも、このショックから立ち直ることがまず第一の問題だという方々が多くおられ、心を砕いているとのことです。

先ほどの店先の会話と同様、健常者の一歩前に出た、コミュニケーションを取ってくださる行為が本当にありがたいそ

す。先日あるレストランでメニューの説明を受けた時、難聴の旨をお伝したところ、その方は細かい図を書いて説明して下さいました。本当に感激されたそうです。

続いて「筆談」の体験です。

コミュニケーションが目集中するとき、筆談は格段に重要です。しかし書くという動作は、おしゃべりとは決定的に異なります。要領よく、短い単語を連ね、強調は図を入れ、アンダーラインをまた丸で囲むなど工夫が求められます。参加者全員で互いに筆談を試みましたが、現実の難しさに改めて驚いた次第です。



2人ペアで筆談体験

Close-up

## 「宝塚情報ボランティアネットワーク」

### 市民情報の発信を担う

阪神淡路大震災をきっかけに立ち上げ、『防災減災の情報発信』と『IT社会とのつながりの学びの場』を2本の柱と掲げ、活動を続けているグループです。

避難所マップやバリアフリートイレマップの作成、パソコンスキル支援、LINE講習会やロボット講習会など幅広い活動を長きに渡り行ってきました。22年が経過。私たちを取り巻くネット環境も大きく変化しています。そして宝塚市地域防災計画に「防災ボランティア本部」となることを受け、「災害時の情報伝達についてのシステム構築」をはかる時期と考えて取り組み始めています。「コンピュータやインターネット技術の変化に対応するのは大変ですが、その変化を楽しみながら活動してます」と話してくれました。

#### <メンバー募集>

- パソコンやスマホに慣れ親しんでいる人
- 地域づくりに関心がある人
- フットワークの軽い人
- 災害への備えが充分でないと感じている人

市民の目線で解りやすく安心できる情報発信を手掛けませんか？



定例会。みんなであいっしょ。